

## 総長との対話

登壇者：

アルトゥロ・ソーサ総長

佐久間 勤（上智学院理事長）

曄道 佳明（上智大学長）

司会：サリ・アガスティン（上智学院総務担当理事）

### 質問 1：佐久間理事長より

上智学院には、上智大学をはじめ3つの高等教育機関と4つの中高等学校があり、いずれもイエズス会の神父たちが創立したものです。キリスト教ヒューマニズムを土台とするイエズス会教育を日本で100年にわたって続けています。学院とその設置校は、グランドレイアウト2.1という10年計画に基づき、自己改革に努めています。そのなかに2つの大きな目的があります。1つは、他者のために他者とともに生きる人を育てるというイエズス会教育の継承と深化、2つめは叡智が世界をつなぐ、世界を視野においた上智の国際的使命を果たしネットワークを強化することです。ソーサ神父様の講話は、上智が掲げる2つの目標が響きあっていることに、大きな慰めと励ましを感じることができました。

高等教育機関と中等教育機関を持つ学校法人を持つ立場から、ソーサ神父様にご教示いただきたいことが2点あります。**1つ目の質問は、「日本のイエズス会学校に期待されることは何でしょうか？」** 大学・学校で学ぶ学生・生徒とともに、大学・学校もまた、他者のために他者とともに働き、生きる存在となることが期待されています。今後、ますますグローバル化が進む世界の中で、上智学院の学校も卒業生も、日本という枠を超えて、世界全体に奉仕する存在になることが求められていると思いますが、**イエズス会本部のあるローマからご覧になって、また、世界各地のイエズス会を導く総長のお立場からご覧になって、日本のイエズス会学校に期待されていることは何でしょうか？イエズス会学校の現代的方向性に基づくとしたら、日本のイエズス会はどのような貢献ができるでしょうか？**

**2つ目の質問です。キリスト教徒が少数であるこの日本社会で、学校における協働はどうあるべきでしょうか？宗教、無宗教を問わず、世界にも特徴ある多様性を持つ日本文化の中で、イエズス会学校としての特徴を生かすには何が重要とお考えでしょうか？**

日本の人口の1%しかクリスチャンがいない状況で、カトリック、プロテスタントを問わず、キリスト教主義の学校の共通の課題があります。そこで学ぶ学生・生徒はもとより、経営者、教職員においてもキ

リスト教徒が少数で、建学の精神を教育や研究、社会貢献を通して実現をするには、当然ながら多様な価値観をもった人々との協働が不可欠です。

イエズス会の精神を生きようとする大学、学校という定義に従えば、上智学院の大学・学校は、イエズス会の創設者であるロヨラの聖イグナチオに建学の精神をもつ、イグナチオ的学校、あるいはイエズス会の創立による学校、というのがふさわしい呼び方となります。グローバル化がすすむこの世界で、また、世界的規模で人が動くこの時代に、これまでのキリスト教社会やキリスト教国という輪郭が失われて、あらゆる地域で多様化が進むと予想されます。

その意味で、私は日本が世界に先駆ける文化的フロンティアであり、先の教皇ベネディクト16世が、第35回イエズス会総会に対して求めた使命として、世界のフロンティアに率先して出かけるようにと言われたフロンティアの1つと言えると考えています。**非キリスト教世界というフロンティアで、イエズス会学校という名前を持つ学校、あるいはイグナチオ的学校に向けられるチャレンジはどのようなものであり、また、どのような協力・協働が求められているのでしょうか？**

#### ソーサ総長より：

難しい質問ですね。今回は、私にとって初めての日本訪問ですので、出来れば私が教えるというよりも、私が学ぶ側でありたいというのが本音です。どのように皆さんが、ご自身の使命について考えていらっしゃるのか、この1週間の滞在のあいだに、よりよい理解と実感を深めることが出来たらよいのですが。

私が伝えたいのは、イエズス会員は、大学を創設するという使命とともに、ここ日本を訪れたということです。上智大学は、彼らとその仲間たちの100年以上にわたる努力の賜物です。イエズス会を代表し、日本社会において対話と精神性を提供し、新しいアイデアや生き方を創出できるこのような場所があることに、お礼を申し上げます。

また、ともにあること、協働することの重要性についてもお伝えしましょう。世界には約200のイエズス会の大学が存在しますが、ネットワーク構築のために昨年、*International Association of Jesuit Universities (IAJU)*という公式団体が設立されました。上智大学がこの国際的なネットワークの一員に加わることは、非常に大きな意義をもたらすこととなるでしょう。

イエズス会教育に求められることは、ここ日本においても、その他の国でも、あまり変わりありません。私たちの使命は、地域に限定されるものでなく、世界共通のものであります。カトリックは、限定的グループであると多くの人々が考えているようですが、実は、万人のためにあります。人種や、国家、言語や文化といった壁を超え、人としての根本的な倫理に基づいた共通の認識を分かちあい、宗教・無宗教

を問わず、同じ人類の一員であることを知ってもらうこと。それこそが、カトリックが担う世界的使命ですし、またカトリック教育とは、そういったことなのです。

カトリック教育は、皆のためにあります。カトリック信者のためだけものではありません。私たちは、大学や教育機関をカトリック信者のためだけに設置することはないですし、特定のグループや分野のために限定することはありません。私たちの信仰とその成果は、全世界の全ての人々そして、多様な文化のためにあるのです。

過去、2年を要した「イエズス会使徒職全体の方向づけ」を決定するまでの識別のプロセスを振り返ると、カトリックが多数を占め、その信仰がアイデンティティである国、またそうではない多くのアジア諸国においても、新しい世俗の在り方が見受けられたのではないのでしょうか。これは、「時のしるし」だと思います。「時のしるし」とは、第二バチカン公会議でもよく取り上げられた言葉ですが、私たちの生きる時代に寄り添う聖霊に耳を傾け、日々新しい息吹を感じとることを私たちは求められています。現在の多様な社会において、少数派であるということは、「時のしるし」において「自由」を指し示しています。

キリスト教国家においても、そうでない国においても、世俗主義が解放の一端を担うということを説明させてください。キリスト教が主な宗教である国家においては、家族も国も皆キリスト教であることから、信仰以外の選択肢は無いといっても良いでしょう。ただし、キリスト教信仰が少数派である世俗主義の国においては、キリスト教信仰は、個人の自由な選択に基づきます。それは、聖イグナチオの精神性、彼の霊躁の第一段階、すなわち個人の選択の自由に通ずるものです。ですからそのような国においては、カトリック信仰を外からも内からも捉えることができるのです。

では、信仰を他者に提案するにはどうしたら良いかといえば、ひとえに自身の信仰を深めることです。そうすることで、もしかするとまわりの人々の中で信仰について知りたいと思う人や、同じ信仰を持ちたいという選択をする人々も現れるかもしれません。キリスト教信仰が少数派であることによって、皆のために開かれたキリスト教信仰への道というものを目の当たりにすることが出来るかもしれません。そのような意味でも、イエズス会大学が、キリスト教徒が少数派であるアジア諸国に点在し、対話の場として互いの考えが自由に取り交わされていることを嬉しく思うのです。

最後に協働について今一度、申し上げます。私たちは、人々が共有する基盤とは、協働だと考えています。もし、誰かが、人々のより良い暮らしのために従事しているとしたら、私たちと共にあります。先ほども申しあげましたが、私たちイエズス会の聖イグナチオの教えに則った大学・教育機関は、人々の生き方の探求の場なのです。そして、キリスト教徒であろうとなかろうと、解放の受容とは、人々の生き方の一部でもあるのです。

## 質問2：曄道学長より

スペイン・ビルバオのイエズス会大学の学長会議でお会いした際に、「ぜひ上智へ」とお伝えしました。この場の実現を切望していました。私からは2つ質問があります。

今の日本における大学を取り巻く環境について、日本の社会そのものが経済的な発展の陰りと、3つの不安を抱えて、1点目は少子化、2点目はグローバル化への立ち遅れ、そして3点目としてデジタル社会への移行が不十分であることです。これらに対し国は、高等教育機関に対し、かなり強い期待と誘導を行っていると思います。例えば、データサイエンティスト養成に向けた期待、あるいは地方創生への対応策の一環として、東京の中心部の大学は定員を増やすことができない状況にあるといったことです。

また、産業界からはグローバル人材養成を強く期待されています。産業界も採用時に、より即戦力を求める姿勢が明確になっています。このような社会情勢の中で、学生たちは大学入学前からどういうところに就職できるのか、就職実績など将来の安定性に注目しがちである、という現状があります。

上智は「他者のために、他者とともに」という教育精神のもとで、その具現化をはかる教育を徹底してきた大学だと思っています。キリスト教人間学をすべての学生が受講しますし、貧困、環境、教育といった課題を抱える地域での教育プログラムや、カトリック大学・イエズス会大学という国際ネットワークにおいて、リーダーシップ養成プログラムなどに積極的に参加してきました。研究レベルでも、正しい社会への誘導を目指す研究所の配置、例えば、人間の安全保障研究所、グローバル・コンサーン研究所、地球環境研究所など、イエズス会教育機関としての実質的な成果もあげてきたと考えています。

この時代、日本社会の今の状況、また、この国際社会における政治経済、あるいは社会保障制度等の現状から、学生がより安定的な将来像を求めるという意味で、短期的な視点に立ちやすいというのは、やむを得ないと考えています。ただ、実務的な効果を生む学びに期待が集まりがちです。そういった現状から考えると、より早期に、我々の「他者のために他者とともに」という教育精神を徹底させる必要を感じています。**このような情勢下において、イエズス会教育の環境下に身を置く意義を、学生にあるいは社会にどう理解してもらえばよいのか、この方策について助言があればいただけますでしょうか。**

2点目です。大学改革が大きく叫ばれています。上智大学の改革は、イエズス会教育に立脚する、私たちの教育の個性を深化させることだと認識しています。**他者への寄り添い、人間の尊厳の尊重といったことを軸とした豊かな人間性の醸成を礎に、社会全体に目配りができる教養を備えつつ、更に高度な専門軸によって、地球規模の課題解決にリーダーシップを発揮できる人の育成に徹し**

**たいと考えています。一方で、イエズス会教育機関としての根本的な役割を、この日本で発展させることこそ、現代社会に向けた私たちの強いメッセージになると心得ています。この方針について、ご意見をいただけますでしょうか。**

## **ソーサ総長より：**

とても具体的かつ複雑な問題についての提起でした。今回、私ははじめに韓国を訪れ、そこでイエズス会大学の西江（ソガン）大学も訪問しました。そこでは、新しいキャンパスを開設するかどうかについて、大変大きな議論となっていました。大学を拡張させて競争力を保たなくてはならない、ランキング上位の座を確保しなくてはならないというプレッシャーこそが、その理由でした。この件に関して十分な議論、熟考、そして洞察が行われた後、西江大学では新しいキャンパスは開設しないこととなりました。大事なことは、ランキングのトップを獲得することよりも、優れた人格の形成においての評価を得ることが重要という結論に達したからです。

マーケティングと人格形成の間に生じる緊張関係は、注視されるべき点です。私たちの役割は、有能な人の育成ですが、教育市場においてトップランキングに入ることはありません。イエズス会大学の存在価値は、学生たちのより有利な就職というようなことではなく、他のことであるべきです。このような緊張関係は、マーケティングと人格形成の狭間のみならず、教育産業において重要視されているさまざまな事柄と、私たちが提起する教育の狭間にも存在します。

このようなことと向き合うのは、イエズス会に身を置く者にとって、典型的かつ日常的なことですが、それが緊張関係、すなわち和解への道だとしても、一方の側面を排除することだけでは、それは成されないというも確かなことです。緊張関係があるということは、人生における戦いかもしれませんが、救いともいえます。どちらかの一方の側面に傾倒してしまったならば、私たちの使命が果たされることはないでしょう。学生の就職と人格形成の狭間の緊張関係においては、何らかの成果に至ることを目標に掲げるべきです。テクノロジーの進化が目覚ましい現在において、昔のようにタイプライターの打ち方を教え続けるわけにいかないのは確かだとしても、私たちはもう一方の大切な側面、誠実さを伴う一人の人間を育てるといったことを忘れてはならないのです。

先ほどの話の中で少しだけ触れましたが、緊張関係が関与するもう一つの側面に、政治的関与という点があります。私たちは社会の一員で、その社会はある目標を掲げ、それを達成するために構築されなくてはなりません。イエズス会大学・教育機関においては、政治参加の重要性が周知されています。もし、我々の教育機関に学ぶ学生・生徒や、そこで働く教職員が共通善を尊ぶ善良な市民でなかったとしたら、私たちの目指すところから遠くかけ離れています。政治的なアクションも重要なポイントです。例えば政府の教育予算がどの様に使われるのかといったことについてです。人格形成という点

で有益である教育の機会を、いかに平等にもたらすことができるのか、そして、それらの件についてどのような議論を生み、影響を及ぼすことができるのか。大学の利益だけではなく、社会全体のための行動を起こさなくてはなりません。そういったことから、政治的な側面は複雑な問題点をはらんだ緊張関係の在り方の一つといえるでしょう。

さらには、イエズス会の大学というアイデンティティ構築という点においても、現代は大きな努力が強いられる状況かと思えます。アイデンティティとは、永遠のものではなく、常に刷新されるべきものです。そして私たちのアイデンティティは、大学の学生や教職員にかかっているという過言ではありません。単によい大学だからといって、彼らはイエズス会の大学に所属しているわけではなく、何らかの召命をもって、日本社会により善き貢献が果たせると思っている故に、私たちの大学に在るのです。もしかすると、私たちは、教職員育成のために、更なる時間や物資を投ずるべきかもしれません。

ここで働く皆さんが、各自が専門とする領域において、能力を発揮していることは間違いありません、しかし、私たちとのアイデンティティの共有という面において、皆さんに役立つプログラムを用意する必要性を感じています。アイデンティティとは、単にイエズス会を名乗れば良いというものではなく、使命の共有とそこに至るまでのプロセスや、学生や教職員のある一定の基準に基づき持つべき姿勢といったことに深く関わることです。

イエズス会の大学では、学生や教職員、つまりそこにいる全員が教えあう立場にあると考え、イエズス会のミッションの共有といった面からも、人としての精神的成長が求められます。そのためにも十分な時間を取らなくてはなりません。もしかすると、年間行事や予算の見直しといったことが必要とされているのかもしれませんが。イエズス会のアイデンティティを浸透させるために大事なことは、イエズス会員の数ではありません。やるべきことをなさずにして、それは叶わないのです。

最後に、イエズス会の大学にとって絶好の機会であり、挑戦でもある点に関してお話ししたいと思えます。それは、全体像の構築です。ここ日本においても自国の文化に対して多大な投資がなされているということは間違いありません。ただし、自国の文化を尊重することは第一歩に過ぎません。カトリックであるということは、常に誠とは何かを問うこと、普遍であること、多文化ということではなく、統合性を確保するということを意味します。すなわち、次のステップは、日本の文化を他の文化と共にどう充実させるのかということではないでしょうか。

### 質問3：佐久間理事長より

話の中で出てきた Liberation of Humanity という言葉と、政治的関与ということ、もう一つは特に若者とともに歩むということ（*Apostolic Preferences* 3番）について考えておりました。**今の若者には、どのようなことが必要なのでしょうか？そしてまた、イエズス会のさまざまな試みのなかで、若者の心をどのように理解して、あるいは彼らとその声をあげるのを助けるなど、何かそういった試みはあるのでしょうか？そして学校というものが、イエズス会の中で、これからも若者とともに歩む上で重要性を持ち続けるのでしょうか？若者とのつながりについて、何か教えていただければと思います。**

### ソーサ総長より：

これらは、とても重要な点です。最初に、昨年の教会での出来事について分かち合うことから始めます。昨年、全ての教会が受け取った「しるし」は、「若者」でした。2年間、司教、さまざまな分野のエキスパート、若者、その他たくさんの人々が集まり議論と思索を重ねてきました。その中で私が汲み取ったことは、大人が本気で聞く耳を持つならば、若者の考えを変えることができる、ということです。大人にとって考えを変えるということは、なぜか大変困難なことです。大人のイエズス会士なら尚更難しいでしょう。司教であったならば？それはご想像にお任せしたいと思います。

しかし、聞く耳を持つということを真摯に行うのであれば、それは可能です。使徒職全体の方向づけにおける識別においても、第一段階は、傾聴であると示しています。そしてそれを実行するには、まずはその場に居合わせなくてはなりません。第一に、私たち大人がしなくてはならないことは、大人として新しい世界と向き合うことです。本日、冒頭、認識論的な物事の見方のチャレンジに関して話しましたが、若者の観点から物事を見ることを、大人がどのように学ぶことができるのか、これは私たちにとっても難しいことかと思えます。私たちは、若いわけではない。けれども、彼らの視点から世界を見るということを理解するのはできるかもしれない。それには、彼らが身を置く環境で何が起きているのか、そして彼らがどのように感じているのかを知ることです。

例えば、仕事を得ることや家族を作ることについて、私たちも若かりし頃に、それらについて展望したことがありましたよね。彼らが感じていることや考えていることを知る、それが第一段階です。私たち大人は、そのような若者に対し、救いの手を差し伸べなくてはと考えがちですが、まずこのような考え方を改める必要があります。使徒職全体の方向づけにおける識別において学んだことは、若者たちを救うのではなく、若者たちに救ってもらうということです。ここに重要なポイント、視点の変換があります。新たな感性を見つけるために助けてもらうのです。最新の研究によると、現在、新しい人類学の分野が開拓されていると言われてはいますが、一体誰が、それを教えることができるほどの深い理解を持ち合わせているのでしょうか。私たちはそれを学ぶ側であり、その有益な一員でなくてはなりません。

次にお話しすることについても、簡単というわけではありません。それは、大人と若者が責任を分かち合う場をどのようにして創出するかということについてです。長きにわたり、私たちは、若者たちに責任を求めることを伝統的に行ってきませんでした。日本ではどうかわかりませんが、ベネズエラでは、人を雇うときに経験者を求める場合がほとんどです。大工さんを例にしてみましょう。もし経験豊かな大工さんが必要だとしたら、その経験はどこで積みばよいのでしょうか。経験はお金で買えません。そういった意味でも、責任や経験を分かち合う場というのが必要なのです。

最後に、私たち大人が留意すべきは、一貫性を持つということです。若者たちは一貫性の有無についてとても敏感です。もし言うことと、やることに食い違いがあったとしたら、パートナーとしてやっていけないなんて思えませんよね。大学においては、私が、その昔学生だったことを思い出します。もし教員が学生に対して、評価時に伝えたことを繰り返さないで欲しいと伝えたのであれば、それは終始一貫していません。また、すぐ戻るから一時間ほど待つてほしいといった場合も同様です。若者との関わりあいにおいて、彼らの成長を促すにあたって言動の首尾一貫は、とても大切なことです。私たちは、人々、一人ひとりの人間の形成において責任を担っています。それが私たちの役割であることを忘れないようにしましょう。

#### **曄道学長より：**

**講演の中で、和解の人生の源になる、それが大学という場であり、大学のコミュニティがそういった場になるべきだと話されていました。これは私たち教職員が人生をかけて考える問題だと思いますが、若者たちにどのような経験をしてもらおうと、この理解に対して効果的であるか、お考えがあれば教えてください。**

#### **ソーサ総長より：**

イエズス会の世界においての経験から伝えられるのは、私たちが暮らす世の中は混沌としているということです。その原因は、戦争、人種、そして宗教などさまざまですが、これらによって人々の間に隔たりを作っているのです。私たちは、自分たち自身を分断するため、ありとあらゆる理由を探しあてます。

このようなことから、イエズス会は、前回の総会において、和解と統合を我々の使命として位置づけました。なぜならば、私たち人類は兄弟であり、敵対することや、違いにばかり目をむけることをすべきではないのです。私たち違い、それは文化と言えます。先ほども述べた通り、異なる文化間の交流は、私たちに豊かさをもたらす存在です。多文化とは、私たちの宝です。多様性とは、神が私たちを創造

した所以でもあり、そうあることが、父なる神の子である私たちのあるべき姿でもあります。

人々が兄弟として暮らすということはチャレンジであり、すべての局面において私たちの使命である和解の糧となります。だとすれば大学は、常に多様性を容認する場であり、全体主義的なものであることはあり得ません。多様性を容認し、和解が促進される場であるためには多大な努力が要されます。違いはあって然るべきです。違いや違いとともに生きることを奨励し、違いを理由に差別や対立するのではなく、違いから学ぶのです。

もし大学が、大学で過ごす皆の多様性を容認する場であることに成功したならば、社会における和解に大きな貢献となることでしょう。それには、学生や、教職員の皆さんに、社会から弾かれるということが一体どういうことなのかを知る機会を持つことは大切なことです。大きな違いや不公平について理解を深めると同時に、大学の日常においても、それらを実際に経験するのです。

## 学生からの質問

**山本 夏希さん（総合人間科学部教育学科3年）：**

多くの課題が点在する世界において、イエズス会の教育と価値観は、地球や自己、そして他者を気にかけて、それらに責任をもつ人材を育成してきたと思います。近年世界では、国連の提唱するSDGsの実現に向けて、ESD（Education for Sustainable Development）がさまざまな学校で取り入れられていると思います。SDGsの中心には、「誰も取り残さない」というスローガンがありますが、その**SDGsの実現に向けたESDと、イエズス会教育の価値観に違いはあるでしょうか？あるとしたら、どのような違いでしょうか？**

また、**SDGsやイエズス会の2番目の優先課題を実現するいずれの場合にしても、不自由のない暮らしをしている人々、社会的な弱者、そしてマイノリティの人々など、全ての人々が当事者意識をもって、連帯して取り組んでいくことが重要だ**と思います。一方で、その概念を知らない、もしくは知る機会がない、関心がないといった人々も多いです。そのような人々に対し、**イエズス会教育やイエズス会教育を受けた人々はどのように働きかけていくべきだ**とお考えでしょうか。

**ソーサ総長より：**

SDGsやESGはとても重要かつ有意義な取り組みだと思います。イエズス会としては、2030年の目標達成を掲げるSDGsにできる限り貢献できるよう尽力します。2週間前にイエズス会員のグループ

が、国連で開催されたあるフォーラムに参加した際にも、そのような意思表示を行ったところです。系列大学をはじめ、イエズス会の集いや関連する機関、そして社会貢献活動などを通じ、活動を行っています。これらの取り組みが想像以上に難しいチャレンジであるということは確かです。

これはとても興味深い試みだと思うのですが、現在 IAJU (International Association of Jesuit University) に加盟している大学のビジネススクールが、共同で持続可能な社会におけるビジネスを学ぶプログラムを開発しています。これらのビジネススクールにおいては、そうではないビジネスについても教えているからです。新しいタイプのビジネスを学ぶプログラムはどのようにあるべきか、そして、どうやって教えることができるのか、それは一つの例に過ぎません。経済優先の考え方がある中で、持続可能な開発にたどり着くような新たな考え方の提案は真のチャレンジといえるでしょう。

現在のアフリカおよび南アメリカにおける鉱山開発の状況は、大変嘆かわしいものです。地球破壊に繋がるということにもかかわらず、同じことが繰り返されているのです。アマゾンでは、先住民の方々や彼らの文化が危機に晒されています。アフリカのコンゴも同様です。これらの事象は、私たちの日々の学びや教えから、大きくかけ離れてしまっています。一貫性ということについて先にもお話ししましたが、プラスチックの使い方や、燃料および資源の節減についてなど、私たちは常日頃から、よりよい生活のために何ができるのか考えるべきです。私たちの日常には多くの変化が求められていますが、それらが容易いことではないことは確かです。現時点では、まだまだ私たちを突き動かすほどに、問題が十分に認識されていないようにも感じます。ただし、ささやかな変化でも積み重ねることによって、大きな変化に繋がるというのは確かなことです。

### **対話後のサリ理事によるコメント：**

上智大学、あるいは上智学院の構成員の1人として考えると、イエズス会日本管区と上智大学は、教会にあるいはイエズス会に大きな貢献をしていると思います。日本管区といえば、2人のイエズス会総長が日本から生まれていることは特筆すべき点です。教会においても大きな役割を果たしたヨセフ・ピタウ大司教（元学長・元理事長）、ローマの教皇庁立グレゴリアン大学法学部長として活躍中の菅原裕二教授のような方々に代表されるように、グローバルな社会においても大きな貢献をしていると言えます。

日本の教育現場という点では、カトリック教育はカトリックのためではないという立場での教育が行われている大学・学校として、今からでも刷新していかなければならないことがあると思います。その中の1つとして、イエズス会教育が行われる現場では、教職員がそのアイデンティティを担い、そのための養成を受けて教育に関わっていくことがとても大事だと非常に重く受け止めました。この点について、特に関わっていきたくと思いました。